東京漂流

藤原新也

著者●藤原 新也(ふじわら・しんや)

1944年3月、福岡に生まれる。東京芸術大学油絵科中退。第3回木村伊兵衛賞、第23回毎日芸術賞などを受賞した。

文・絵・写・音など芸術のジャンルを自在に超越する新しい時代風景の思想家・哲人として私たちは目を瞠るばかりだ。畏敬なのかもしれない。私たちに等しく関わる「生存」を鋭く問う、同時代の巨人に思えてならないのだ。全アジア13年間の旅は、すでに著者にとって過去のものとなった。苦行をへた漂泊者の眼には、いま、もっとも新たに挑んだ東京すなわちニッポンが、果たしてどう映ったのか是非知りたいところではなかろうか。本書は、著者にとっての初めての、書き下ろし長編である。

東京漂流 定価 1,500円

昭和58年1月8日 第1刷

著者 藤原新也
発行者 冨田耕作

発行所 株式会社 情報センター出版局

東京都新宿区四谷2—1
四谷ビル 〒160
電話 東京(358)0231
振替 東京4—46236

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
廣済堂印刷
0095—283011—3458
© 1983 Shinya Fujiwara

東京漂流／目次

1、豚は夜運べ

魚影／8
車輪／14
キツネ火／18
蜃気楼ミラージュ／22
幼女／26

2、二つの十戒

老象／34
リポビタン／45
転位／50

3、旅の氷点

家猫／58
逆旅／66

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

4、小さな黒魔術
旅後の草／74
密　室／79
ジグソー／83
カルフォルニア／88
「あとがき」／94
5、善行潮流
遺伝子／100
巫　女／104
八二年五月革命／109
6、青天白日
日本国憲法／114
核／123

ファミリー／125

7、飢渇前線

晴天幻想／138

餌／146

ミルク／152

8、熱狂

コレラ／162

枕経／175

9、長い喜劇

シナリオ／194

BUY AND HAPPY／201

田園調布／205

八〇年一二月／211

10、アップルパイ家族の家訓
フランスパン／224
魔女／232
11、東京漂流
熱界雷／244
生牡蠣／250
埠頭／256
断罪／264
男根／270
悪霊／276
12、FOCUS
連作／286
撮影／303

不動産写真／325
方　舟／341

13、ニンゲンは犬に食われるほど自由だ

地獄極楽／376
水　子／385
十字架／408

あとがき／442

装幀……亀海昌次

1、豚は夜運べ

魚影

私は現在、東京の芝浦に住んでいる。

芝浦というところは港区に属してはいるが、都心部という感じがしない。

街は地方港湾都市の街はずれのように素っ気ない。

近ごろは、都心を離れて郊外の街に行っても、英文字を連ねた洒落(しゃれ)たブティックやファーストフードなどの店を見かける。しかし、この芝浦は都心部なのに、それすらもない。

芝浦はいわゆる文化らしき匂いもしなければ緑の潤いもない、現代風俗や流行現象にも疎(うと)い、何か、人間の住む街としては、相当に投げやりな街である。

この素っ気なさは街の成り立ちからきている。芝浦は、かつて東京湾の一部を埋め立てた倉庫用地であった。占領軍のいたころは海岸通りから海側にあるすべての倉庫がアメリカ軍によって使用され、日本人は入ることができなかった。私の住む芝浦四丁目は海岸通りの海側にあるから、かつての占領軍倉庫群のただ中にあるということになる。

したがって都の区画地図を見ると現在もその一帯は準工業地帯のままである。都市の地区分割は中心地区、商業地区、居住地区、工業地区とそれにわずかな休養地や農地に区分されるが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

私の住むこの街はその区分けからすると人の住むためにできた街ではない。人間が中心になって暮らしていたり、蠢(うごめ)いていたりする地域を「街」と呼ぶなら、私の住むこの芝浦は街とは呼び難い。

準工業用地といっても、現在は煙を吐くような大きな工場は見あたらない。建物の主流となっているのは、大企業や中小企業の倉庫、印刷や鉄工などの小規模な工場、長距離便トラックの車庫、電気関係の社屋、それに都バスの野天停留場などである。

この街のもう一つの特徴は、それらのおもしろみのない灰色の建物の間を縦横に運河が走っていることだ。かつてこれらの運河は倉庫の荷を運ぶためのものであったり、工場用水に利用した排水を流したりしたらしいが、今はあまり使われていない。しかしそれが使われていないからきれいかというと、都内のどの河川や運河でも見られるように、十分に濁(にご)っている。そして夏場にはところによって臭う。

運河には八千代橋とか藻塩(もしお)橋などという名のコンクリート造りの橋がほうぼうにかかっている。その橋の上を歩いていて、眼下の濁った水面の下にときおり魚影を見ることがある。

釣り流行(ばやり)の昨今である。魚影があれば、そこには釣人がいる。シーズンになるとそれらの橋の上から工員風の男や、小学生くらいの男の子たちが釣り糸を垂らしている。ボラの前身であるイナやハゼがかかる。魚には勢いがない。針にかかると抵抗する素振りもなく、濡れ雑巾の

ようにボソリと水面を割って上がってくる。ハゼはバケツの中ですぐに腹を見せ、イナは歩道の上で鰓から鉛のような血をわずかに流して死ぬ。死んだ魚は再び運河に投げ捨てられる。

釣人たちは、ただ魚を釣り殺すようなゲームをやっているだけなのである。

人々はお通夜のように黙している。どんなに大きな魚（時には四〇センチくらいのイナがかかることもある）が釣れてもその周辺から生き生きとした歓声は聞こえない。それはただ釣ったものを漫然と死なせてしまって捨てる、という目的のない釣りを繰り返しているからだと思う。それが単なるレジャーであるなら、釣ったものをまだ命がある間に河に捨ててやればいいのに、なぜか人々は魚が死んでから河にそれを捨てる。それを見ていると、人々には何匹の魚の命を奪ったか、ということがその釣りの成果になっているように思える。命を奪わないと釣った実感がないのかもしれない。

無感動な釣りをしている子供たちの中には、芝浦界隈の集合住宅に住んでいる子も多い。この準工業地帯の街もここ五、六年、工場や倉庫などが壊されてマンションやアパートが建つようになった。私は旅のために長い間、家をあけることがあるが、半年も留守にしていると、突然、見慣れた巨大な倉庫がなくなっていたり、見たこともないマンションが建ち上がって化粧をしていたりする。都心部には集合住宅を建てる有休地もなくなってきて、こういった準工業地帯のようなところが新たな住宅開発地となってきているのである。

私の住んでいる入れ物は、そのような新興開発集合住宅の一角を占める。その一一階建ての中層集合住宅は一応マンションであるが、それほど高級なものではないので、私はアパートと呼んでいる。

私はこのアパートの八階に三年前の五月に移り住んだ。旅に出ていることが多いので、私の住居はいつまでも生活というものの匂いがなくがらんとしている。どうも、いつまでたっても私は定住民になれそうな気配がない。そのような私の住居のことを、ある雑誌に次のように書いたことがある。

流れている水は腐らないということを知っている人は案外少ない。

ひとところに淀んだ水は必ず腐っていくという運命を持っている。常日頃、私は、ヒトというのは、この水だと思っている。ヒトの体を構成する有機物の大半が水だということもその理由の一つだが、ヒトの体の中にある水が腐らないのも、やはりその水がひとところに長居せずに絶えず循環しているからに他ならない。

私にとって、家とか、部屋というのは、その私という水を通行させる一つの場所といえる。私は自分が腐りたくないから家とか部屋に長い間とどこおりたくない。とどこおりたくないから、私は物に執着しない。物に執着して家財が部屋に増えると、それに水がぶつかって流れにくくなる。だから、私の部屋は何年たっても、不動産屋が最初に私をそこに案内した時と同じままにガランとしている。

このような無愛想な部屋はあまり居心地がよくない。居心地がよくないから、また、私もそこに長居しないというわけだ。

ただ一つ困ったことに、この部屋に外からの訪問客が来た場合、彼らも、私と同様にこの部屋を居心地がよい、とは感じないらしいことだ。第一に、椅子も机もソファーも座ブトンさえもないこの平ったい床のどこに座ったらよいのか、訪問客は一瞬途惑う。こういう訪問客を迎えた場合、部屋の主である私もこの部屋のいったいどこに座ったらよいのか途惑うのであり、訪問客と向かい合いながら、みんないっしょになって目のやり場に、腰のやり場に困って落ちつかず、おどおどしているという光景が生まれる。果ては話の持っていき場も、どことなくぎこちなくなって、それをとりつくろうためにさして意味のないことを口走ると、このガランとした空洞みたいな部屋にコロン！　と淋しく響きわたって、空しい感じが、きわだつのである。

だから、私たちは、本当の言葉を一生ケンメイに自分から引き出さねばならない。そういう会話が交流し出すと、おのずと、このガランドウの部屋の中に、それぞれの人々の腰のやり場、目のやり場が決まってくる。だからこの部屋に三時間以上居て自分の本当の言葉を見つけて帰った人は、うしろ姿も来た時とずいぶん違って、どことなく腰がすわっているように見える。

三年前、この住居を下見するために山手線の田町駅に降りたその日は、四月の日曜日だった。不動産屋のばらまいた地図をたよりに、私は芝浦の街を歩いた。

日曜日の芝浦はゴーストタウンのようだ。人も車も閑散としている。わずかな店屋もすべて

閉めきっている。そのころは今ほどマンションなどの建物もなかったので、今よりずっと殺風景だった。灰色のコンクリートの壁に足音を響かせながら大通りに出ると、品川のほうに向けて窓のないのっぺりとした建物が連なり、車も人影も見えなかった。私は生体系の途切れて死の色になった海の底を歩いているような気がした。

進行方向に点々と真新しいオレンジ色の鮮やかな文字が見えた。あの一一階建てのアパートへと人を導いていく看板である。細い木枠に白い布を張ってある、そのいくつかの看板は乱暴に引き裂かれていた。

木枠の外にたれた布片は、ときおり東京湾の方向から吹いてくる春の乱風にめくれ返った。潮の香はなかった。

いくつかの看板を通り過ぎ、八千代橋を越えて次の角を左に折れた時、目の前を犬が走った。あばら骨を浮き立たせた雑種犬であった。私にはそれがすぐ野良犬であることがわかった。土色の体は汚れ、毛並みは荒んでいた。尻尾は地面に向かって垂れ、長い間、意思表示を失ったままでいるように見えた。犬は私を無視していた。そしてどこやらに行く目的でもあるかのように、同じ歩調で淡々と小走りに走り続け、視界から遠ざかった。

犬の過ぎったその向こうに、私のめざすアパートが建っていた。私は立ち止まってその建物をしばらくの間見ていた。アパートの横にそのアパートよりも巨大なコンクリート造りの大商

社Mの倉庫が建っていた。その周辺にはトタン造りやスレート造りの壁に北海道の地名を書いた長距離便トラック車庫が見える。アパートは殺風景な建造物の間にあって、いくつもの穴のあいた人間の納まる倉庫のように見えた。

私は、なぜか、この無機的な匂いを放つ街が気に入った。

車　輪

それ以来、私が実際にこの街に住んでいた期間は一年くらいではないかと思う。他の二年間、私はアジアのどこかの街で暮らしていた。

旅から帰ると、私は朝、ベランダに出て歯を磨きながら、長い間街を眺めている。寝起きざまの目に、陽ざしを受けた街が眩(まぶ)しい。つい数日前まで、アジアのどこかの人間のごった煮の景色を映していた私の網膜は妙にうら淋しい。

しかし慣れてくると、この殺伐とした街のたたずまいもなかなかいい。

人間味のないのがよいのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com